第二章　一茶句と近世民謡

―一茶句碑の調査に基づいて―

一　はじめに　句碑調査から作品論への試み

一茶の発句を論じ、その特徴を検証しようとする時、真っ先に直面する問題がある。それは、二万句以上に及ぶ膨大な発句数に対して、どれだけ客観的な整理法に基づいた見解を示すことができるか、という問題である。筆者もこれまでの研究において①、たとえば丸山一彦校注『一茶俳句集』（岩波文庫・一九九〇）の二〇〇〇句の中から統計をとったり、あるいは『父の終焉日記』成立当時の俳風に調査の対象をしぼったりしたことがある。つまり、一茶研究は、一研究者の主観的な抜粋による句の選択のしかたに偏ったり、または一茶の一時的な趣向に目がゆきすぎたりすることが多い。それは本当にやむを得ないことだろうか。ここでは、一つの試案として、二〇〇二年末までに建立された一茶の句碑二〇六基②に刻まれた作品を対象にして、新しいサンプルに基づいた一茶句の研究をすすめたいと思う。

一茶の句碑について最初に気付くところは、全二〇六基のうち、一二五基（七割以上）が現在の長野県に建立されているということであろう。とくに、信州の風土や生活と密着した発句の場合、句碑ははじめから風景や街並み（環境）とマッチするように想定され、いわば現代美術の〝環境彫刻〟のようなオブジェとしてみられることが多い。まず一基だけ、例をとりあげよう。野尻湖畔（レークサイドホテル）の碑に

しずかさや湖水の底の雲の峰　（寛政句帖、仮名遣いは句碑に従う）

とあるが、この句碑自体も水面に映るような位置に在り、やはり避暑地の閑かさを象徴するようなオブジェになっているのである。ジャクリーヌ・ピジョー氏によると③、日本の文学碑は、（中国等のそれらと異なり）まわりの自然・社会に溶け込んだ複雑な作品としてみられるもので、それは日本独特の芸術観によるものだという。同氏は『伊勢物語』七八段の「あおき吾をぎそみて」できた山科宮邸の歌碑を取りあげて、

この碑は、原始的な自然と密着な関係を持っているように見せかけたという日本詩歌の曖昧さの結晶である。（中略）自然のままの石は人間の創作世界に溶け込むようにさせられている

と述べている。後程、句碑に刻まれた一茶句の特徴を検証するが、こうした〝環境彫刻〟的な句碑という意義からすれば、そこでは風土・生活を詠んだ発句が最も相応しいということになろう。

次に、建碑の年代を調べると、一茶には古碑が非常に少ないということが注目される④。年代

ごとに整理すると、江戸末期に三基、明治に三基、大正に三基のみあり、昭和には一三八基、そして平成の一四年間だけで一五八基にのぼるという数字になっている⑤。一茶句碑の建立は、平成に入ってから急増しているということがわかる。昭和初期まで知名度が少なかった一茶句の評論史的背景がここにもあらわれているのであろう。いうまでもないが、一茶に比べて、芭蕉の句碑の方が全国的にみて圧倒的に多く残っている。『俳文学大辞典』⑥によると、芭蕉の句碑は二五〇〇基を越え、「古くは、翁塚（翁墳）といわれる芭蕉塚があり、遺品や儀仲寺の芭蕉の墓の土を埋める疑似墓としての碑が多かった」だという。同辞典によると、近代の俳人では、約二〇〇基といわれる高浜虚子が圧倒的に多く、碑の大半は全国の門人によって建てられたものであることが知られる。つまり、芭蕉の場合も、虚子の場合も、句碑はもともと、師匠の〝分身〟的なモニュメントとして、忠実な門人によって建てられるものが多いといえよう。それに対して、一茶の場合は、全国に弟子が少なかったためか、最近になって、地元を中心に、建碑がすすめられるようになったのである。したがって、一茶の場合は、刻まれた発句の選択も、ほとんどは門人や俳人や俳文学者によるものではなく、一般人や「信濃町　碑（いしぶみ）の会」のような一茶愛好家の会の趣味によるものが圧倒的である。

では、一茶の愛好家たちの趣味によって、どんな作品が多く選ばれているのであろうか。この愛好家たちによる評価には、一茶句のどんな特徴が浮かび上がるのであろうか。

二　「小動物」と「家族」という題材

二基以上の句碑に刻まれた発句を一覧し、その題材を考えることにする。

▽一四基　・痩（やせ）蛙まけるな一茶是（これ）に有（あり）　（七番日記）

▽四基　・ゆうぜんとして山を見る蛙哉　（七番日記）
・雀の子そこのけ〳〵御馬が通る　（八番日記）

▽三基　・あの（名）月をとってくれろと泣子哉　（七番日記）
・雪とけて村（町）一ぱいの子ども哉　（七番日記）
・むまそうな雪がふうはりふはり哉　（七番日記）
・我と来て遊べや親のない雀　（おらが春）
・苦の娑婆や桜が咲ば咲いたとて　（梅塵八番）
・開帳に逢ふや雀もおや子連　（だん袋）
・蝸牛そろ〳〵登れ富士の山　（文政版『一茶発句集』）

二基のみに刻まれた三〇句については省略するが、右にあげたような最もとられることの多い一〇句だけを観賞してみよう。小動物（雀三句、蛙二句、蝸牛一句）を扱う作品が計六句とたいへん多くなっているのである。また、その小動物や人間の“子”、つまり一般的な親子関係を詠んだ作品（五句）が目立っているのである。事実、この二種類の題材は、句碑三〇六基にわたって、一貫して大きな割合を占めていることが知られる。三〇六基のうち、人間よりも小さな動物を扱う句が刻まれた句碑数は八四基（約二七％）に上り、また人間や動物の親子関係（「親」、「父」、「母」、「子」）を題材にした句の句碑数は三三基（約一一％）となっているのである。先にみたように、日本の句碑はその環境と密着な関係をもっているが、右の一〇句のうち、善光寺を詠んだ「開帳に」の句以外は、固有の“土地への挨拶”といえる発句がない。また、本来が“座の文学”であった俳諧の連歌から独立したものとしての“発句”というジャンルでは、家族、とりわけ作者の私生活を詠んだ作品はすくない。おそらく自己を強調するようなものは、あまり好まれなかったのであろう。例えば、先の

我と来て遊べや親のない雀　（おらが春）

の句意には、“私も親がいない”という作者の強い主張が表れており、読み手はついに作者の私生活に引き込まれそうな印象がある。ある意味で、「我と来て遊べや」という呼びかけ表現は、「雀」の後ろにたつ読者自身に向かっているといえるのではないか。この句において一茶は、小動物というテーマと家族というテーマの両者を巧みに用いて、孤児である“我”を苦しめている社会に向かって、呪文を吐くように叫びかけたかたちで一句を詠んでいるのである。街角に立つ句碑となると、呪文は警句のように社会的メッセージに変わるのである。『おらが春』にみるこの句の前書きを揚げてみよう(7)。

「親のない子はどこでも知れる、爪を咥（くは）へて門に立」と子どもらに唄（うた）はるゝも心細く、大かたの人交（まじはり）りもせずして、うらの畠に木・萱（かや）など積（つみ）たる片陰に蹋（かがま）りて、長の日をくらしぬ。我身ながらも哀成けり。

実はここで、子供の頃の一茶が他の子供達に聞かされて淋しい想いをしたとしてあげている、“唄”は、近世民謡であり、小野恭靖氏によると(8)『絵本倭詩経』（えほんやまとしきょう）（明和四年刊行）の二番歌などにみる「孤（おやのないこ）は　目かけて遣（やりや）れ　爪を咬（くはへ）て　門にたつ」の類歌なのであった。

幼稚に向けた教訓的民謡である。親のない子の惨めな様子を強調することによって、親の大切さを説き、この時代の身分制度の維持を目指した儒教道徳の暗い一面を示していよう。

「親のない子は……」の歌謡は、まさに近世日本の社会が生んだ申し子とも言うべきものであるが、これが一茶の句作の一契機となったことはきわめて注意に価する事実であろう。

と小野恭靖氏は述べているのであり、そこには一茶句の新しい読み方が示されていることになる。

三　近世民謡とのかかわり

一茶の「我と来て」の成立に、近世の教訓的民謡とのかかわりがあることは、ほぼ容認できると考える。それならば、一茶の句全般において、そうした近世民謡の影響を見とどけることができるのであろうか。実は、一茶の得意とする「小動物」という題材自体が、近世民謡、あるいは童謡などにも著しく多くみられる題材なのである。北原白秋編『日本伝承童謡集成』(9)に、中村正爾氏は次のように述べている。

> 動物については、その類歌数が比較的多く、しかも亦児童の日常生活と環境に最も近いもの、すなはち、蛍・蜻蛉・蝶等の昆虫類を初めに取扱ひ、つぎに爬虫類・魚類・鳥類、そして獣類に及ぶ。

一茶の「親のない雀」ではないけれども、「親のない山雀(やまがら)」を扱い、孤児が誰にも相手にしてくれないということをなげきかつつ近世童謡の例として、次の唄が指摘できる。

> 寒(さむ)や小寒(こさむ)や　山雀来ても　親ちや無ければ　茶も呉れぬ
>
> (『日本歌謡集成』　伊勢国二重郡菰野村(10))

また、句碑に非常に多い題材である、蛙の句を検証してみよう。四基に刻まれた

> ゆうぜんとして山を見る蛙哉　(七番日記)

について、和歌以来の伝統的な〝蛙の声〟ではなく、擬人化された姿態が強調されていることが、いかにも〝一茶らしい〟ところである。この点は同じような趣向のもので、『日本歌謡類聚』(11)に、羽後の飽海郡酒田の次のような近世民謡が出ているのが注目される。

> 雨の降る時　川端通れば　蛙あくらかいて　後生願ふ

さて、小布施町龍雲寺の一茶句碑にみる

> なむ／＼と口をあけたる蛙かな　(七番日記)

にも、驚くほど民謡に近い発想がある。「芭蕉の笑い、一茶の笑い」に、堀切実氏は(12)、

> 夕不二(ゆふふじ)に尻を並べてなく蛙　(七番日記)

などを取りあげて、文化初期以降の「一茶の笑い」の特徴として、「大と小・美と醜・近と遠など、対象のコントラストを誇張した表現法」が著しいと指摘している。たしかに、句碑の多い一〇句を一覧すると、少なくとも ―「ゆうぜんと」、「雀の子」、「あの月を」、「蝸牛」の四句にはこうした対比による笑いを認めることができる。そして対象のコントラストによる笑いも、近世民謡によく見かける技法である。たとえばよく知られている一茶の「蝸牛そろ／＼登れ富士の山」(文政版『一茶発句集』)の句に対しては、『日本歌謡類聚』(13)に所収されている山城の国の馬士唄があげられよう。

> 富士の山をば　鳶(とんび)がさらふ　奈良の大佛　蟻が曳く

さらに、従来一茶調の最高潮期(文化初期以降)に著しく多いとされている小動物を擬人化する句

法についても(14)、民謡調の反映がみられる。ここまであげた民謡に比喩表現や見立ての例が著しかったが、次の大和の国の民謡(15)においても、一茶句と非常に近い擬人的表現があるのである。

恋し／＼と　鳴く蝉よりも　鳴かぬ蛍は　身を焦す

これは一茶の「母恋し／＼と蝉も聞(きこ)ゆらん」（文化五～八年句日記、柏原・杉山浩一宅に句碑あり）と類似している。『日本国語大辞典』や『角川古語大辞典』などを調査した範囲でも、蝉の声が「恋し／＼」と擬人化された例は他に見出せなかった。角川書店の『俳句大歳時記』（一九八四年刊行）をひいても、「蝉」と「恋」を取り合わせた例句さえ見あたらないのである。ところで、一茶の句の場合は民謡の〝恋〟の心に代わって、母への恋に転じて詠まれているところにその独創性が表れているといえる。

一般に全く別のジャンルとして考えられている俳諧と近世歌謡ではあるが、江戸中後期には、意外と、この二つのジャンルの間に交流があったのではないかと思われる。

「春風馬堤曲の源流」において(16)、潁原退蔵氏は中興俳人の挑戦的な創作姿勢を指摘し、近世歌謡の作者　―　そこでは江戸の座敷芸である河東節(かとうぶし)の作者と、俳人との間の交流の可能性を次のように述べている(17)。

> 吉原に関する一の俳文集ともいふべき『洞房語園集』（元文二年刊）の如きも、従来の分類と同様な序・賛・引・頌・説・記等の名目に従ってはいるが、実は必ずしもそれらの名目に捉はれない自由な態度が見られるのである。この間から河東節の作者が出たりして居るのも、あるいはさうした曲詞にまで俳諧文章の進出を意味するつもりであったかも知れない。

また、潁原氏は、月渓が池田の宿に滞在した際、土地の名物を題材にして、饗宴用の歌謡・催馬楽(さいばら)を模倣した「池田催馬楽」という作品を残したことに注目して、天明俳人が抱いていた新しい詩形への意欲を明らかにしているのであった。

一茶が活躍した環境に即してみれば、右の俳人の分脈とは全く異なるが、当然、信州住住の時期や西国紀行時代、あるいは地方出身の門人が多かったという江戸の葛飾派の人脈においても、様々な民謡を耳にする機会があったに違いない。小野恭靖氏は(18)、

> 近世民謡の編集、刊行は十八世紀半ばから十九世紀半ばに至る約百年間に集中する（中略）第一のピークに成立した民謡集には、前時代の盤珪禅師の教訓歌謡の流入が濃厚に認められる

といわれている。江戸中後期に普及した民謡には教訓的な要素がもっとも重要な特徴であったという指摘はとくに注目される。

ところで、先に世間に人気の高い一茶句には、家族関係を詠んだ作品が多いことを述べた。数多い例句の中から、二句だけをとりあげよう。

①おや(親)と云(いふ)字を拝(おがむ)らんこころもがえ　（八番日記）
（信濃町柴・小林晴信宅に句碑あり）

②子生がきやら／＼笑ふ榾火哉　（おらが春）
（信濃町古間・小林昇宅に句碑あり）

この二句とも、一茶晩年によくみる〝家族愛の詩〟という趣があり、さらにいえば道徳的と呼び得る発想が感じられるのではないか。実はいずれの句に関しても、安永五年（一七七六年）に刊行された『山家鳥虫歌』（19）に、これらに近い発想の民謡がみられるのである。

①親と云ふ字を　絵にかいてなりと　肌の守と　拝みたや（摂津一〇一）

②野にも山にも　子無きはおきやれ　万の蔵より　子は宝（対馬二九二）

という二首には、小野恭靖氏がいうように、「盤珪禅師の教訓歌謡の流入が濃厚に認められる」とみてよいのであろう。そして同様に、晩年の一茶の句には、親孝行というテーマや教化的な趣がしばしば見あたるのである。句碑のあるもので、その他の例句をとりあげると、

こうとし米親と云（いふ）字を拝みけり　（八番日記、一基）

なまけるないろはにほへと散桜　（七番日記、一基）

心の字に水も流れて梅の花　（文政九・十年句帖写、一基）

などがある。こうした一茶晩年の〝教訓俳諧〟とも呼び得る俳風においても、間接的に盤珪禅師の歌謡の影響をみることができるのではないだろうか。この点について、さらなる研究が必要であろうが、一つの調査方向として、当時の雪中庵や其日庵における心学の普及を考える価値があるかも知れない。たとえば、蓼太門で武蔵の国の俳人荘丹（享保一〇―文化一二）の著書には、『俳心学』という俳諧書があり、近世中期以降の俳諧書の記述に、心学的思考の反映を探ることは困難なことではないといえよう。堀切実氏によると（20）、

心学普及の最大の貢献者であった堵庵は、その著『座談随筆』（明和八年刊）において、盤珪の説をしばしば引用して、これを支持し、自説の展開の根拠として用いているのであった。

と述べている。一茶が所属した葛飾派の門人の間にも、盤珪の教訓歌謡が話題になったりしたといえるかも知れない。

四　結論

以上、句碑に反映された一茶句の作風を調べたところ、小動物や家族を題材にした作品が圧倒的な人気を集めているということがわかった。小動物の扱い方に関しては、一茶句には擬人化や見立て、そして対象のコントラストを誇張するような発想が著しく、近世民謡 ― とりわけ童謡にもほぼ同じ題材の扱い方を見つけることができた。また、「家族」という題材を扱う発句には、近世後半に普及した教訓民謡と同じような思想や表現を認めることができた。ときに一茶は教訓民謡にみる盤珪禅的思想の裏を詠んだり、軽妙なズレを生かして自分の私生活を語ったりしていることもあるのである。しかし、晩年一茶句によくみる「家族」という題材の扱い方には、教訓民謡という背景の重みをぬきにしては考えられない面がある。俳諧史的な観点からみても、一茶が所属した葛

飾派の門人の間で、民謡が発句の発想源にされたという可能性は充分に考えらる。また、子供のころ信州の寺小屋などで教えられた童謡や日常生活で唄われていた教訓民謡などに、一茶は関心を持っていたはずである。音調の観点からみても、一茶句には歌謡のリズムパターンの影響がみとめられるである(21)。一茶は、単純でインパクトの強い表現を求める中で、ときにはメルヘン的であり、ときには社会性にあふれる晩年の一茶調の確立まで、近世民謡の影響を大いに受けたと思えるのである。

ところで、一茶没百年後、駐日フランス大使を務めたフランスの詩人ポール・クローデルは、一九三八年に『日本短詩集』*Petits Poèmes japonais*(22)という日本詩歌の翻案集を出版した際、驚くほどの文学的なセンスを生かして、近世・近代民謡二五首に、一茶の「蝸牛」の句一句だけを併せて採録して編集をしているのであった。こうした一茶句の民謡的性格は、句碑を建てた日本の一般国民の趣味にも反映しているのであり、おそらく一茶の愛好家も海外の大詩人も同じような一茶観を示しているとみてよいのであろう。

註

(1) 拙稿「一茶句の音調論 ― フランス詩学の視点から」(『江戸文学』二六号・二〇〇二、九)、「『父の終焉日記』の文体にみる比喩表現」(『連歌俳諧研究』一〇〇号、二〇〇一、二)を参照。

(2) 「一茶の句碑」『一茶』(信濃町一茶記念館刊行・十三版・二〇〇一年五月発行)に掲載された二〇〇基に加えて、その後確認されて『一茶の句碑』(里文出版・二〇〇二、四)に掲載された八基を足した二〇八基となる。もちろん未発見のものはまだ存在するだろう。

(3) Jacqueline PIGEOT, *Questions de poétique japonaise*, Presses Universitaires de France, Paris, 1997, p.28、ジャクリーン・ピジョー著『日本詩学の問題』(マブソン訳)

(4) 最も古い句碑(「松陰に寝て喰ふ八十餘州かな」)は、一茶没後文政一二年に建てられたものである。詳しくは、柴田光彦「一茶追善松陰句碑小攷」(『跡見学園女子大学国文学科報』第三〇号・二〇〇二、三)を参照。

(5) 一基は建立年不明

(6) 鍵和田ゆう子筆「句碑」『俳文学大辞典』(角川書店・一九九五)

(7) 『一茶全集・第八巻』「おらが春」(信濃毎日新聞・一九七八)に拠る。『七番日記』、『句稿消息』、『浅黄空』に同句の前書きがあり、最初の「親のない子は……」の引用も小異で出ている。

(8) 小野栄靖「近世民謡と一茶」『近世歌謡の諸相と環境』(笠間叢書三六・笠間書院・一九九九)

(9) 中村正爾「動物植物唱篇の覚書」、北原白秋編『日本伝承童謡集成』第二巻(国民図書刊行会・昭和二四)

（１０）高野辰之編『日本歌謡集成』第十二巻（春秋社・昭和四）
（１１）大和田建樹編『日本歌謡類聚』（下、盆踊唄）（博文館・明治三一）
（１２）堀切実「芭蕉の笑い・一茶の笑い」（『国文学　解釈と鑑賞』・一九九八、五）
（１３）大和田建樹編『日本歌謡類聚』（下）（博文館・明治三〇）
（１４）初期一茶研究の頃から、一茶句にみる擬人法の多用が注目されている。たとえば、正岡子規の「一茶の俳句を評す」『俳人一茶』（三松堂・明治三〇）Ｐ・１８１を参照。最近では、堀切実「一茶の比喩表現」（『表現としての俳諧』、ぺりかん社・一九八九）を参照。また、拙稿「『父の終焉日記』の文体にみる比喩表現」（『連歌俳諧研究』一〇〇号、二〇〇一、二）には、晩年一茶にみる擬人法のみならず、擬物法の分析も試みた。
（１５）高野辰之編『日本歌謡集成』第十二巻（糸引唄、大和国）（春秋社・昭和四）
（１６）頴原退蔵「春風馬堤曲の源流」『頴原退蔵著作集』第一三巻（中央公論社・一九七九）
（１７）『珍書刊行会叢書』第一冊「洞房語園集」（珍書刊行会・大賞四）Ｐ・７０を参照。
（１８）小野恭靖「近世民謡・近世童謡　―　江戸庶民の歌声」『歌謡文学を学ぶ人のために』（世界思想社・一九九九）Ｐ・２１７
（１９）新日本古典文学大系６２『山家鳥虫歌』（岩波書店・一九九七）に拠る。
（２０）堀切実「美濃派俳諧史と心学」（『江戸文学』二六号・二〇〇二、九）
（２１）本論文　第Ｉ部　第一章を参照。
（２２）*Petits Poèmes japonais* in *La Revue de Paris*, 15 / 11 /1936。本論文　第II部　第二章を参照。